

の図書見本市に参加した。

## 18) 出版文化賞

幾つかの政府主催の国民賞が、例えば文学、論文、歴史、医学等の分野にある。最も重要なものは、

「文化奨励賞全国コンクール」(Concurso Nacional de Premios de Fomento a la Cultura)であり、18の部門に分れている。その他「ホセ・マリア・アルゲダス小説コンクール」(隔年)(Concurso Bienal de Novela José María Arguedas)及び「一

般小説コンクール」(隔年)(Concurso Bienal de Novela Universo)がある。

## 19) 書評

技術及び専門雑誌は別としてリマの二つの主要新聞、『ラ・プレンサ』と『エル・コメルシオ』が、とくに日曜版で書評の欄を定期に設けている。この図書欄は地方の書籍商の広告も設けている。同様に『カレタス』や『オイガ』のような雑誌が図書の欄を設けている。

(みたに・ひろし 南山大学)

---

## 鷗外の寄贈本

森鷗外の自筆識語を持つ『招月亭詩鈔』写本1冊が、当館にある。この本の巻首に「大正6.4.2、寄贈」の紫印が捺されているので、誰れかの寄贈本であることは、たしかであるが、鷗外自身であるのか、他の人であるのか、気にかゝりながら20年余りが過ぎた。

近時鷗外の書簡を読んで行くうちに、この写本が鷗外自身の寄贈であることを、ゆくりなくも知った。そして、巻首右下に「小野節氏」とある鷗外ならざる墨書の意味も推測することができた。ここに、図書館史の一節として披露しておきたい。

鷗外の識語は、次の如くである。

大正丁巳三月関於市獲之 源高湛印  
印は、「千楽山房記」と、三行の朱方印である。丁巳は、大正6年である。

小野節あて鷗外の書簡は8通及び死後小野家へ送った甲文1通が知られている。うち4通は雑誌『鷗外』4号に、のこりは、

雑誌『国文学』16巻6号に紹介されたが、後者は全集未収載である。

後者のうちの大正6年3月21日の書簡には、当館の寄贈写本についての説明があり、刊本惠与を希望している。刊本は上下2冊、天保12年の出版で、山陽の序、杏坪の跋があり、欄外に茶山、杏坪、山陽、小竹、松陰の詩を収めてある。写本は評と跋とを省いている。ちなみに、嘉永3年に『竹雨齋詩鈔』(3冊)と改題出版されている。この本は小野家の蔵梓で、京都の近江屋佐太郎に出版させていたことが、兩刊本の奥附から推定される。

鷗外は3月16日の手紙で、写本入手を報告している。

頃日泉蔵様詩集ノ写本手ニ入レ閲読仕候。実ニ尊重スベキ人物ト奉存候。右集ハ頗ル高価ノモノナリシヲ買求候。刊本有之候モノニヤ奉伺候

この鷗外の間に対して、小野節は刊本の所持と写本の内容について答えたものと思う。

(71ページへ続く)

コレクションのすべてを内容的に把握し、物理的に維持、管理していくことの困難さが頭を掠め、また1人のレファレンス・ライブラリアンのカバーできる守備範囲に対する不安が頭から離れなかった。それは、資料を持ちながらも、結局は、専門分野の閲覧室へ案内してしまうのではないかと、もどかしさと不安である。

また、たとえば、メイン・リーディングルームに置かれた、日本に関する参考図書調べてみた時、経済、産業関係のダイレクトリー、統計などの継続物は、新しい版が揃っているものの、語学辞典類は、数も少なく版も古い。特に、日本・日本研究に関する書誌類は予想外に少なかった。一方に主題別閲覧室を持ちながら、それらをも含んだ“ジェネラル”なコレクションを作ろうとする時の基準、範囲の難しさなどを改めて考えさせられた。

メイン・リーディングルームのレファレンス・コレクションは、これからも世界一であり続けるだろう。しかし、その性格は時代の要請により、少しずつ変わって行か

ざるをえない。各主題別閲覧室のレファレンス・コレクションの強化と、社会科学閲覧室の出現により、このレファレンス・コレクションが、今後、その“ジェネラル”に、どのような方向付けを与えていくのかは興味深いところである。

#### 〔付記〕

“パフォーミング・アーツ閲覧室の試み”

これまで、音楽、映画・TV、放送・録音の各部は、主題領域を共有しながら、そのコレクションは資料形態で分けられ、それぞれ独自の閲覧室のもとで発展してきた。このため“ミュージカル・コメディ”などのテーマを研究する利用者は、関連資料を求めて、これらの閲覧室を渡り歩かねばならなかった。しかし、今、“資料形態ではなく、研究主題が王様である”との利用者優先の思想から、音楽、劇場、映画、ダンスに関する資料が一カ所に集められ、新館に“パフォーミング・アーツ閲覧室”として実現されようとしている。

(ちよ・ゆり 当館派遣職員・在ワシントン)

(27ページより続く)

日記を見ると、大正6年3月1日に文行堂を訪れている。ここで購求したのではあるまいか。しかし、写本には、浅倉屋の大正3年の符丁が書かれており、本の流れが知られる。

鷗外は、3月25日に刊本恵与の謝礼を述べるとともに、図書館寄贈の件を承知したこと、また京都府立図書館への寄贈を勧め、当時図書館司書であった弟潤三郎(間もなく辞職した)を紹介している手紙を認め、4月10日に架蔵写本を上野の図書館へ小野節の名で寄贈したことを報告した手紙を書いている。日記を検するに、4月3日

に妻・茉莉・杏奴と上野の山に遊んでいる記事が出ている。寄贈願の日は2日としたのではなかったか。当然、鷗外自身の寄贈願の存在有無ということになるが、そこまでは調べてない。

小野節は長尾村(現倉敷市内)の大地主で、井上通泰を通じて和歌をよみ、やがて鷗外と交を持ち、『しがらみ草紙』にも、その詠歌が収載されている。『伊沢蘭軒』中に、節の先祖である詩集の作者泉蔵が登場している。頼山陽は、この小野家に泊ったこともある。

(人文課 朝倉治彦)